令和７年度 第２回さいたま市立教育研究所運営委員会会議録

１　開催日時　　　令和８年１月３０日（金）　午前１０時００分～午前１１時１５分

２　会　　場　　　さいたま市立教育研究所　２階　第２研修室

３　出席者名

＜運営委員会委員＞　　※敬称略

戸部　秀之（委員長）	馬場　敏男
河野　秀樹	辻　美由紀
細井　博幸	中山　真希
根岸　君和	渡邊　勝利
茂呂　宏幸	丹　　能成
小林　由美恵	髙野　千華
和田　牧子	伊藤　真弓

＜事務局職員＞

所長補佐	後藤　正憲
調査研究係長	白田　大地
研修係長	山内　俊明
ＩＣＴ教育推進係長	分須　広樹
ＳＳＳＰ事務局	佐野　　奨

欠席者名

＜運営委員会委員＞　　岸　　智絵

４　会議の公開　　公開

５　傍　聴　人　　０人

６　内　　　容　　（１）令和７年度教育研究所の事業報告について

・さいたま市スマートスクールプロジェクト
・ＩＣＴ教育推進事業
・調査研究事業
・研修事業

（２）質疑、協議

７　問い合わせ先　　さいたま市教育委員会学校教育部教育研究所

電話　０４８（８３８）０７８１

8　質疑応答・協議要旨

委員長	協議題「教育DXを踏まえた授業改善を進めていくための教職員の学びについて」一人ずつ意見を伺いたい。
委　員	SSSP、各研修等の実践や研修がいつでもどこでも誰にでも視聴できる環境が整うとよい。ＩＣＴの活用は方法論の視点より、子どもの変容として思考や理解の高まりを感じられると教員もやる気になるのではないか。研究所の頑張りはわかるがビルドが多いので、スクラップもできないか。市の学習状況調査は授業改善の視点であるならば抽出でもよいのではないか。教員の学びには余裕や時間が必要である。
委　員	教員の生成ＡＩ活用が徐々に広がっている。使っている教員や身近な業務から業務改善につながっている。「とにかく使う段階」から「本当に必要かを問う段階」へフェーズが変わってきている。対面の意義や価値を見直す必要もある。タイピングスキルの格差が大きくなってきたようである。教育データの授業改善の視点として平均点に目を向けがちだが、そこから外れてしまう子どもへ学校全体の施策、個別支援の対応が必要である。管理職は教職員の学びをコーディネート、ファシリテートしていく力が問われている。また、目の前の事象だけでなく、社会全体の動向も踏まえ、先を見据えた視点も必要である。
委　員	グランドデザインを現場レベルへいかに落とし込めるかを大切にしている。情報セキュリティ研修を全教職員向けに実施したことには大きな意義があった。オンデマンド動画の視聴は多様な働き方に有効であるが、受講状況の把握が課題と感じている。教員は変化に敏感であるため、端末更新に当たっては委員会の実態把握や後押しによって安心感を与えてほしい。情報活用能力の育成に向けて具体的な方法もあるとよい。デジタル採点システムは中学校で有効活用している。教職員コンピュータの更新についての概要等は早めに共有してほしい。学力向上ポートフォリオはAIを活用するなど学校間で横展開したり、市全体として在るべき姿を共有したりできるとよい。管理職は最新の授業を理解していないと教員へ指導できない。研修等によって校長自身がこれから目指す授業の姿を捉えていかないといけない。本校では、夢講座生であった初任者が辞めてしまった。夢講座生には初任者の中のリーダーとして活躍してほしい。
委　員	若く経験未熟な教員が教え方に囚われすぎて、学習内容や学習評価の観点が抜けてしまっている。教育課程指導課と連携を密にして学び方改革、教え方改革を進めてほしい。指導主事が教員役、教員が生徒役になって新たな学びを体感する学びもよい。データの利活用は大切であるが、授業改善の目指す姿がわからずに活用が進んでいない。管理職の職務が肥大化しており、管理職になる前にその道筋から学ぶ必要があると感じる。

委　員	教員が自ら学んでいない印象がある。学ぶ意欲があっても余裕や機会、時間がなく、経験だけ積み重ねている。校長が自ら学ぶ姿勢を大切にし、その姿勢を示していきたい。校内の研修では意義を実感し、教員が腑に落ちるようにしないと学ぶ意欲は高まらないと考えている。
委　員	iPad、Google への移行に抵抗を示す教員もいるため、格差が広がる懸念がある。端末の操作や個人情報の管理等これまでと違う部分はＤＸ推進部を中心に慎重に進めていく。生成ＡＩパイロット校として授業の中での活用が進む中で、子どもの深い学びへのつながりを実感している。互いの実践の参観から学び、自身の実践に生かしていくことが大事である。各教科の専門部長に情報提供はしているので、専門部を通して情報提供をしたり、市教研など多くの方が授業を参観したりする機会がある広く展開できると思う。
委　員	適切ではないＡＩの活用があり得るため。教員が危機意識をもって学んでいる。研修において学ぶことの必要性や効果が得られる機会を設定することが大切と考えている。
委　員	埼玉県の研修として実感を伴った学びが大切と感じている。センターの課題として、研修の中で気付きがあっても行動変容につながらないことを挙げている。初任研や５年研の受講者がどのような経験や背景があるかを踏まえて研修を設計する必要がある。アセスメント、ファシリテートを大切にして研修を設計している。校種や専門性、年次など経験の異なる教員との関われる機会も設定している。今後は埼玉県同士で研修による交流も行っていきたい。
委　員	デジタル学習基盤を活用した授業が進んできた。学校課題研究も一斉の課題から個別の課題を立てて取り組む実践に変わってきている。
委　員	タブレットを効果的に活用して学んでいる子どももいれば、特性によりこだわりが強い子どもへの対応が必要なこともある。ルールを見直し、効果的にＩＣＴを活用したい。
委　員	自身の授業スタイルに固執している方に一方的な考えは伝わらない。だが他者の授業を公開し見合うことには効果があった。一定期間授業公開をできる機会が増えていくとよい。
委　員	養護栄養もデジタル活用を進められるとよい。デジタル格差が予想されるので、好事例を共有していきたい。イントロダクション、リフレクションなど研修の構成を工夫していきたい。
委　員	校長先生方に指摘いただいた課題は、各所管も把握している。学校のニーズに応えていくため引き続き御協力をお願いしたい。よい授業を見ることが授業改善につながる。発信の仕方も大事である。国から答申等が出ると新しいワードによって不安や戸惑いがある。受

	け取る側の教員が安心できるよう、変わることばかりでなく、これまで通りでよいこともメッセージとして発信していかなければならない。ＩＣＴの活用によって生み出された時間で子どもの見取りや声掛けをしていけるとよい。
事務局	それぞれの立場から、様々な視点で、多くの課題（宿題）をいただいた。研究や活用モデルの作成は進んでいるが、大変忙しい学校、教員に、それをどう実装、浸透させていくか、意味のあるものと意識してもらうかが課題である。メッセージの発信の仕方についても、教員の意識や置かれた状況を踏まえて丁寧に行っていく。